

Actions アクションズ

若手医師活動報告

COVID-19感染による北大病院 の勤務における現状アンケート 実施に至るまで

北海道大学病院 男女共同参画推進室／内科 1

清水 薫子



中華人民共和国湖北省武漢市において、昨年12月より発生したCOVID-19感染症は世界的なパンデミックを起こしており、今後も長期的な対策が必須の状態です。本邦においてもその影響は甚大であり、特に北海道は感染拡大・増加時期が早く、新規感染者が途切れない札幌市に位置する北海道大学病院において、職員の業務への影響を把握するアンケートを実施いたしました。現状の把握からそれに基づく今後の対策の提案につながることを期待しております。

男女共同参画推進室が実施部門として、渥美達也室長の下、清水薫子と内科1の阿部結希先生がアンケートを作成いたしました。発案には北海道大学病院のCOVID-19対策委員会の診療リーダーである内科1（呼吸器内科）教授の今野哲先生の「COVID-19感染に関連する職員の欠勤はどのくらいだろうか」というお言葉があります。その上で、お二人のお子さんの育児をされている阿部先生が「職員が休みたい、休む必要があると考えた日数と実際の休暇取得日数はどのくらい一致しているのだろうか？」という疑問や、教育や研究面も含めた大学病院としての包括的な変化も調査が必要だという清水の希望で、少しずつ特色が出てきました。

結果は匿名で回収・集計され、当院での問題把握・提案、論文などの公的使用のみを目的とするという但し書きの上、医師・歯科医師・看護師・看護助手・医療技術部・薬剤部と広く対象とし、7月に実施し、現在集計中です。

このような影響があったのだと認知することのみならず、それらの変化を職員がどう受け止めているのかを知ることが最も重要であり、コロナ禍により見直された点や代替案でなんとか切り抜けているのか、それともコロナ禍が落ち着いてもそれがスタンダードとなりうるのか。どのような対策が可能なのか。得るものは少なくないと期待しております。

研究面でも動物実験がストップしたり、臨床研究においても、患者様の通院自粛・検査実施制限による影響は非常に大きいです。そして想像もできないような変化を経験しているのが教育面です。医学部生が大学に来校できず、授業はすべてweb配信となりました。それ以上に病棟での実習や身体診察などの実技教育ができないことに対し、教員が頭を抱えております。病棟で実際に医師が診療する場面を見たり、質問をしたり、進路の話をする機会がなく、これらのことは医学教育の枠を超えた意義があるため、私自身もその空白の大きさに呆然としつつも、webでもないよりは良いとして機会の提供を企画しております。

病棟実習に関しましては、看護師・技師の教育も同じ状況です。そのような中、学会でも教育関連部門が主導し、共有可能な教材の準備などの対応を進めており、webでの学術総会や講演会などが少しずつ再開され、学習の機会が増えてきております。この新たなスタートを機に、医療界における情報交換や知恵の出し合いが活性化し、再構築が進むこと、そして微力でも寄与できるように前向きに悩んでみたいと思っております。

本アンケートの結果は、改めましてご報告させていただきます。旭川医大・札幌医大もCOVID-19関連アンケートを実施されており、北海道の3医育大学間の情報交換・対策における学びを共有できることを切に願っております。



内科1教授室の面談スペースにはシールドが設置されております。

左 阿部結希 右 清水薫子